

# カントの「我」と経験

筒井文隆

## 第一章 自己認識

我々は『純粹理性批判』の「觀念論論駁」に問題の発端を求め、カントの「我」と経験的世界の成り立ちをいくらか明らかにしたい。「私自身の現実存在 *Das Sein* の、単なるしかし経験的に限定された意識は、私の外なる空間における諸対象の現実存在を証明する」という定理及びこれに続く証明を見て先ず気づくことは、意識といって認識といわぬことである。このことを指摘するのは独断的觀念論に与するわけではないが、《私自身の認識は私の外なる物の現実存在の直接なる認識を証明する》といえねば、最終的証明にならぬと思われるからである。第二版序言において訂正された証明においては次のようにいう。「……私のうちに見出されるところの、私の現実存在のすべての限定根拠は表象である、そしてそれは表象として、みずから表象とは異なった持続的なものを要求する。即ちそれとの関係において表象の変化と、従ってまた表象かその中で変化するところの時間における私の現実存在とが、規定されるところの持続的なものを要求する。」してみると私の現実存在を限定するのは先ず表象（直接には持続的なものでなく）である。ともあれここにいる限定は思惟によるそのみでなくいわば質料的限定をも含む。何故なら表象は表象たるに止まるを得ずそれを超えたものを要求する、というからである。「あらゆる表象は表象としてみずからの対象を持つ（A108）」というのである。だがむしろこの要求の正当なることを証明するのが「論駁」の任務では

ないか。以下訂正された証明を辿ってみよう。

私は内的経験によって時間中の私の現実存在（従って時間中の私の現実存在の限定可能性）を意識している、とカントはいう。このことは「私の現実存在の経験的意識——私の現実存在と結びつき、而も私の外にある或るものとの関係によってのみ限定され得るところの——と同一なのである。」内的経験は認識であろう、思惟主観としての我はそれの一端として時間中のわが現実存在の意識を有する。この意識は他方で外なるものに関連している。しかし何故表象を超えて物にまで関係せねば意識は限定され得ないか。「外感の現実性は構想力と異って次のことにのみ基く。即ち外感、内感の可能性の制約として、内的経験そのものと不可分に結合されるということ。そしてこのことはここで生起している。」わが現実存在の意識は外なるものに対する関係の意識と一つのものではあるが、物の認識に踏み込んでゐるか、つまり「論駁」の定理に倣つていえば物の存在をよく証明しているか。ここにおいて「直観」の能力の二重性（悟性的且つ感性的）が密かに承認されているのではあるまいか。——図式論にみられる如く、範疇・図式・現象の間の同種性 Gleichartigkeit によって、直観は純粹悟性概念の演繹に従う。換言すれば直観は常に悟性を背後に伴っている。単に多様を与えるのみの「直観形式 die Form der Anschauung」ではなくて、表象の統一を与える「形式的直観 die formale Anschauung」である。だがかかる直観が現実性を持つ所以を尋ねると、更に形式的直観といわば多様そのものとの同種性をも想定せねばなるまい。

「私の感覚に関係している物が私の外にあるのだ daß es Dinge außer mir gebe」と私が意識している確かさは、私が時間中に限定されている確かさと同じなのである。」このことは《内的経験の意識の現実性は外的経験の意識の現実性を証明する》ということを超えるか。一方が他方を証明する（たとえば演繹の方向を徹底する）というのではなくて内外両経験は同時に成り立っているのだと解しても、両者はそれぞれ内的質料と外的質料とを問わねばならぬであろう。「……私の現実存在がそれに於いてのみ限定され得るところの内的直観は感性的で時間制約に拘束され

(表1) 自己認識の二条件

|                     | 形式的限定                                                                                                          | 質料的限定                                                     |
|---------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|
| 甲<br>(B 157)        | (1) die Handlung des Denkens<br>あらゆる可能的直観の多様を統覚の統一にもたらす                                                        | (2) eine bestimmte Art der Anschauung<br>これによって左の多様が与えられる |
| 乙<br>(B 158)<br>(註) | (1) das „ich denke“, das den Aktus ausdrückt, mein Dasein zu bestimmen<br>この「我思う」によって, „das Dasein“ は既に与えられている | (2) Selbstanschauung<br>感性的で且つ被限定者の感受性に属するところの時間を, 根底に有する |

ている。だがこの限定従って内的経験自身は、私のうちに存しない従って私の外なる或るもののみに存するところの、或る持続的なものに依存する。」内的直観が知的であるなら限定作用（意識）を発するであろう限定者、を直ちに直観できて自己認識は質料的にも自己完結する、即ち外界にかかわりなく完成するであろう。内的直観が感性的である

ことは、一方では時間限定の制約を受けこの制約は更に外感における限定を俟たねばならぬことを意味する。他方ではあるがままの私の把握不能なことを意味する、つまり自己認識に於ける質料の問題を残す。それならば同じように、外なる持続的なものは、外的直観が感性的なるが故にあるがままのものではなくて現象するものとはならぬか。かくすれば我々は内的経験（自己認識）と外的経験（持続的なものの認識）とを共に究明せねばならない。

自己認識は二条件を要する（表1）。「従って私自身の現実存在 *mein eigenes Dasein* は、現象やまして仮象ではないけれども、内感形式に則り、私が結合する多様が内感に於いて与えられる特殊な仕方によって、生起し得る (B157~158)。」それ故自己認識は我が我に対して現象する限りでの認識であるという。

そして *mein eigenes Dasein* は現象でないとすれば何か。同表乙を考察すると、*das Dasein* は思惟の限定作用によって既に与えられている、しかし「私が *das Dasein* を限定すべき仕方、即ちそれに属する多様を私に於いて定立すべき仕方 (B 158註)」は未だ与えられていない。する

と思惟は das Dasein 全体を「」のうちに持つていない。思惟は現象ならざる mein eigenes Dasein のみを das Dasein のいわば部分として与えている。これが現象として生起するには「特殊な仕方」が必要となる。ではそれはどんなものか。

我々は次のような直観を有しない。「その自発性を私が単に意識しているだけであるところの、私の内なる限定者 das Bestimmende を、時間が被限定可能者 das Bestimmbare を与えるのと全く同じように、限定作用に先立って与えるところの直観 (B 158<sup>III</sup>)。」「限定者は即ち被限定可能者なりと断言できるのは我々が知的直観を持つ場合に限る。さし当っては時間が与える被限定可能者の何たるかを求めねばならない。それは時間を超えて物自体の如くに想定される我であるか。

内的経験は外に物ありの意識と不可分に結合しているとしても、その結合の仕方は《外は物ありの限、方法、を導入すること》にすぎぬではなからうか。つまり自己認識の質料は外なるものではない。(しかしかかる内的質料というもの解消してしまうならば、自己認識は一つの矛盾を含むものとなる。端的に思惟ありという意識のみが残るであろう。)「私が結合する多様」を検討してみるに、悟性は「多様のこのような結合を産出する (B 154~155)。」結合は産出できても多様、そのものを産出できるか。できぬから多様は感性的というしかないのであろう。知性 Intelligenz は「自分が結合せねばならぬ多様に関しては、自分が内感と呼ぶところの、且つ例の結合を本来の悟性概念の全く外にある時間関係に従つてのみ直観的ならしめるところの、制限的制約に従う (B 158~159)。」ではこのような時間関係はどのようにして成立したのか。

#### 時間関係 Zeitverhältnisse の成立 (B 156)

- (1) 我々が時間を表象するのは、一本の線の形像に於いてのみ可能である。
- (2) 更に時間の長さ Zeitlänge や時点 Zeitstellen の限定を、外物が変化的なるもの Veränderliches として我々にあらわすところ

のものから常に、全知覚内容に対して採用せねばならない。

(3) 従って外感の限定を空間中に整理するのと同じ仕方、内感の限定を時間中に整理せねばならない。

外感限定の整理方法を導入することによってのみ時間限定は成立する、つまり「論駁」の定理がいう「経験的に限定された意識」が成立するであろう。だが白い紙に引かれた黒い線によらねば時間の長さや時点は根源的に表象できないか。我々は先天的空間表象を持ち得るとするならば、そこにおける線および点によって時間関係を表象できるのではないか。

統覚と内感とは決して同一でなく、前者は「すべての感性的直観に先行して空間一般に関係」し、後者は「単なる直観形式を含むのみで直観における多様の結合はない、従って限定された直観は少しも含まない」(B154)。<sup>1)</sup>このような限定された直観は「構想力の先験的な働き(つまり内感に対する悟性の綜合的注入)」を通じての、内感限定の意識(同)によってのみ可能であるという。ここに成立する時間表象は外なる etwas Beharliches にのみ源を発するか。

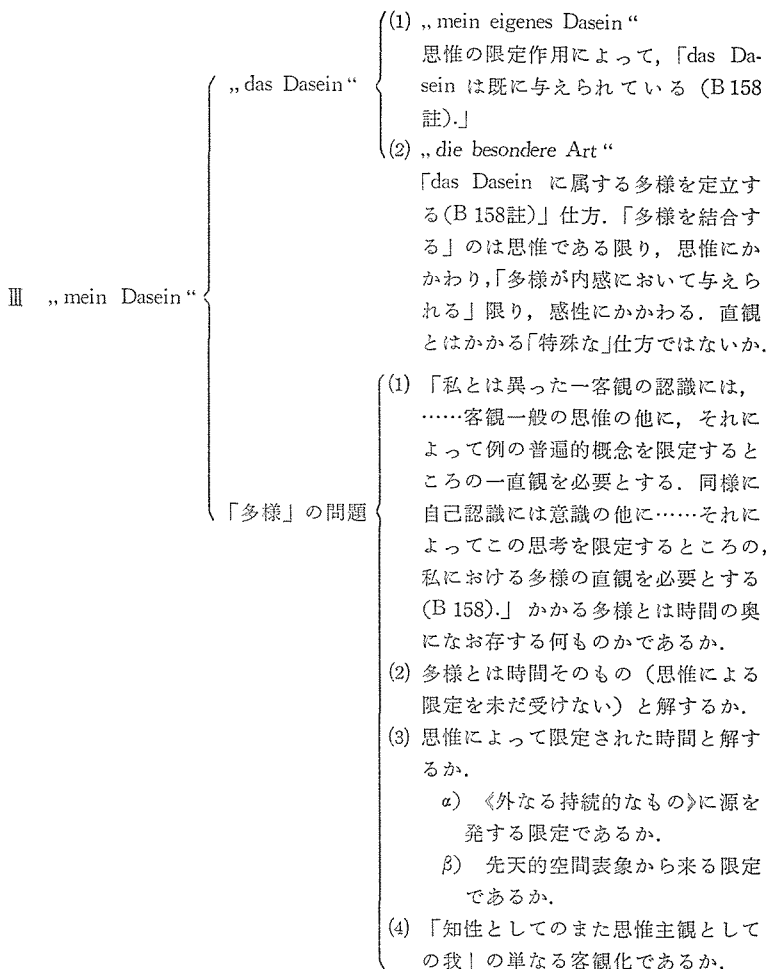
然りというためには、《統覚がすべての感性的直観に先行して関係するところの空間一般》が常に物と不可分であることを明らかにせねばなるまい。だが空間一般の先天的表象を認めるというのならば、「思考において」引いた線に手段を仰いで時間限定は成立するであろう。純粹悟性概念の演繹を裏面から支えるのが自己認識である。即ち、(1)統覚、(2)空間一般、(3)前者が後者の限定方法を内感に導内することによって成立する時間一般、から成るような自己認識である。これは統覚が「ただ我あり nur das ich bin (B157)」において意識している表象——「思惟であって直観ではない(同)」表象——と区別できるか。できるとすれば統覚のいう我ありは思惟ありであって「時間に於ける意識(B276)」ではない。我思うという限定作用によって「das Dasein は既に与えられている(B158)」とこうが、これを与えるような思惟自身は何であったのか。「……知性としてのまた思惟主観としての我が、……自分自身を思惟された客観として認識すると如何にして言い得るか(B155)」かかる問いに則れば自己認識とは思惟が自ら

## (表2) 自己認識の構造

## I „das Bestimmende“ 限定者

1. 「その自発性を我が単に意識する」のみである。
2. 思惟に先行してこれを与える直観（知的直観）はない。

## II „Aktus des Bestimmens“ 思惟



を客観として知ることである。このことが自己意識と異って認識たるためには、思惟自身が時間的になることを要するのであろうか。けれども思惟が自らを客観とするときは如何にして *Dasein* となり得るのか。

統覚と内感を区別して自己認識を問題とすれば、(1)思惟と「時間における意識」のかかわりはどんなものか、(2)認識の質料を何処に求めるのか、(3)時間限定の根拠は物から仰ぐのか或いは先天的空間表象から来るのか、等の問いを生むのである。

## 第二章 「同種性 Gleichartigkeit」

### [1]空間と物

時空中の物は「それが経験的表象による知覚たる限りでのみ与えられる (B 147)」が、知覚成立の根拠を求めれば覚知の綜合、更に純粹産出的構想力の綜合にありとせねばならぬ。空間と物は不可分であり、両者は綜合の相関者 *Korrelatum* をなすのでない (B 457註)とみるならば、「演繹」の方向を捨てぬ限り二者の間に或る同種性を想定することにないか。虚空間は外的に直観される現実的対象ではないが「存在するかも知れない (B 261)」と言い、他方また「空間はそれを限定する(充実させ或いは限界をつける)あらゆる物に先立って絶対空間と呼ばれる。この空間は、外的現象がそれ自身存在するかさもなくば与えられた現象に附加し得るかの限りで、外的対象の単なる可能性に他ならない (B 457)。」先験的感性論においては空間は一切の外的経験の根柢に存するものとされた。だが空間は直観される外的現実的対象でもなく現象の相関者でもなく「現象そのものの形式である(傍点筆者、以下同じ) (B 460)。」第一の「律背及の反定立に対する註においては次の如く述べられる。

#### 空間と物

- (1) 物 *Dinge* は現象として空間を限定する(物は空間に附加し得るあらゆる述語——大きさと関係——のうちの或るものに現

実性を与える)。

(2) しかし逆に空間は自存する何ものかとして物の現実性を、大きさと形態に関して、限定することはできぬ(空間はそれ自体現実的ではないから)。

(3) 従って空間は(充実でも空虚でも)現象によって限界づけられることはあるが、現象がその外なる虚空間によって限界づけられることはない。

(4) ここで空間の充実とか空虚とかは次の意味である。即ち現象によって限界づけられた虚空間、従ってまた世界内部の虚空間は、少くとも先験的原理に矛盾しないから、この原理に関しては認めてよい。

ここに言う先験的原理は無制約者を求める純粹理性の原理ではなく、可能なる知覚の世界における悟性の原理である。この原理は「空間をあらゆる現象の外部に置く」とすれば生ずるような「外的直観の空虚な諸限定(B 457)」に関するものではないと解される。そこでこの原理と「世界内部の虚空間」のかかわりを見なければならぬ。空間が我々の先天的形式であるためには、純粹悟性概念の演繹がいわば時間空間の演繹に引き継がれねばなるまい。つまり空間は単に外的多様を与えるのみの形式に尽きず常に悟性を背負った「形式的直観」でなければなるまい。範疇そのものは現象の中に見出されないけれども図式を介して現象との同種性が主張されるなら、虚空間もまた現象中に現実的には直観されないけれども現象との同種性を想定してよくはないか。実際、我々の感覚に対応するものとしての「すべての対象の先験的質料 *die transendentale Materie aller Gegenstände* (B 182)」をカントは語っているのである。感覚のみが与え得る質料を先験的といひ得るには少くとも右の同種性を想定する他はない。現象と空間は綜合の相関者でないというものにかかる事態を認めることではなかろうか。多様が与えられるということは演繹の考え方を維持する限りそういうものになろう。演繹が宿命的に達する終端が経験の端緒であり、悟性的経験なのである。してみるとこの点に関する限りデカルトの「認識」とそれほど変えることはない。我ありの経験的意識は「外なる他の物の



直接なる意識」ではあろうが、物の質料にまで必然性を以て到達しているかは問題である。

[2] 先験的時間限定と物

先験的時間限定 *die transzendentale Zeitbestimmung* たる図式は先験的限定と時間から合成されるのでなく、限定と時間産出は共になされるであろう。「時間でさえも、直線を引くときに……多様が結合される働き即ち内感が連続的に限定されてゆく働きだけが、従って内感におけるこの限定の連続だけが注意される場合にのみ、思惟されるのである。(客観の限定としてではなく) 主観の働きとしての運動が、従って空間における多様の綜合が、もし空間が捨象されて内感をその形式に従って限定する働きだけが注意される場合には、継起の概念さえもはじめて産出される。つまり悟性は多様のこのような結合を見出すのでなく、内感を触発することによって産出する、*hervorbringen* のである(B 154~155)。」では多様そのものをも悟性は産むことができるのか。悟性が自分の作用のみを注目することが多様の産出且つ結合であるならば、時間は悟性から導出されるといっても過言ではない、逆にまた悟性は時間的である。悟性が限定作用を行うには内感が不可欠であるというなら、悟性は内感の形式を取り出して示すというに止まるけれども内感について形式を語ることが既に形式的直観としての時間——悟性的時間を立てていてのではないか。そうであるなら悟性にとって時間とはやはり自分の働きという他はない。

他方「論駁」においては、経験的意識は「時間限定の制約としての、私の外なる物の存在 *Existenz der Dinge* außer mir, als *Bedingung der Zeitbestimmung* (B 276)」に必然的に結合しているという。かかる物を悟性は演繹の方向からよく包摂しているか。

先験哲学は純粹悟性概念の演繹を企図することによって、その延長線上に時間の産出の問題を抱え込む。悟性の働きの時間の産出を求めるなら、時間の「所有が生ずる」いわば先験的事実の記述が求められるのではないか。時間は或る場合には《思惟と共に且つ思惟によって産出されつつある時間》であり、また或る場合には《既に産出された時

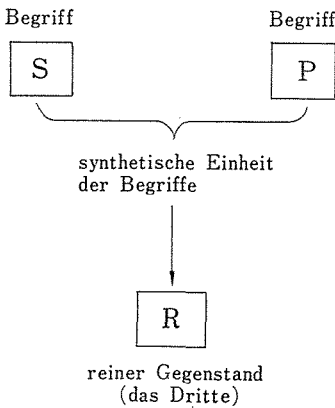
問』即ちカントの言う時間の概念であろう。前者においては自己認識は先験的に完結し、自己認識とは悟性の自己産出である。質料の問題は解消するのである。内感からの思惟の独立を主張するならば、現象する我（自己認識の質料）の問題を残すのである。

### 第三章 経験の可能性の制約

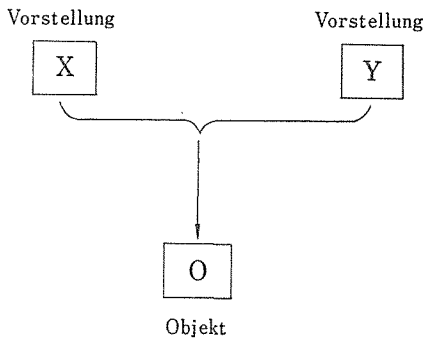
先天的綜合判断の可能性の制約と範圍を論ずることが先験的論理学の最も重要な仕事であり、「所与概念を他の概念と綜合的に比較するには所与概念の外に出ねばならぬと認めるなら、両概念がそれに於いてのみ成立するところの第三者 das Dritte が必要となる (B194)。」そこで内感・構想力・統覚の三者は、先天的表象の源を含む故に、純粹

(図1) 先天的綜合命題と經驗的命題

#### I. synthetischer Satz a priori



#### II. empirischer Satz



綜合判断の可能性もこれら三者に求めねばならぬというのである。「経験はその形式的原理を、即ち諸現象の綜合における統一の一般的規則を、根柢に持っている。この規則の客観的實在性は、必然的制約として、常に経験において更には経験の可能性において、示され

得る。この関係なくしては先天的綜合命題は全く不可能である。何故なら先天的綜合命題は、第三者即ち純粹対象——そこにおいてその命題の諸概念の綜合統一が客觀的實在性をあらわし得る——を、一切持たないことになるからである（B 196）。では第三者たる純粹対象とは名辭的な或るものなのかそれとも命題なのか。もし前者であれば、先天的綜合命題がそこから導出されるべき一者が立てられねばならぬ。「物体は重い、ということ」は、これら二表象が客觀において……結合していることを立言する（B 142）というとき、客觀の原型となるべきものがなければならぬ。且つ客觀は二表象と異なるところの第三者、でなければならぬ。純粹対象は次に見るような「先驗的対象」とは別である。何故なら後者は、表象たる現象が持つ対象だからであり、また諸概念の統一者たり得ないと思われるからである。

#### 「先驗的対象」（A 108～109）

1. 「対象とは……現象がそこにおいて必然的に連結するところの或るものの概念である。」
2. 我々に与えられる唯一の対象は現象である。
3. しかし現象は物自体でなく、再び自分の対象を持つ単なる表象である。
4. 表象たるこの現象が持つ対象は、我々の最早認識できぬ先驗的対象 X である。この対象の純粹概念 *der reine Begriff von diesem transszendentalen Gegenstande* は、あらゆる經驗的概念一般に客觀的實在性（対象との関係）を与え、また限定された直観を含まず、認識の多様の必然的統一である。

（ただ先驗的対象はここに二重の意義を持つ。即ち純粹概念としては多様を統一する統覚の所有するところであらう。主観を起える質料としては我々の認識できぬ X とならう。この二重性を持たせてなお認識に客觀的妥当性を与えんとすることが、先に見た同種性の想定になるのではないか。）

ところで「第三者」が命題であるならば、先天的綜合命題の客觀的妥当性を言わんとする意図は次の如くに解されよう。《經驗的認識（綜合判断である）は、その原理即ち先天的綜合判断を、根柢に持つ。この原理の客觀的妥当

性は経験の可能性の制約において示される。この制約が命題であるなら、命題自身が如何にして客観的妥当性を示し得るか。或いはそのような命題をも超える何かがあるか。

いずれにしても先天的綜合判断と経験判断との間には二種の対応があると解せられる。一つを仮りに $\alpha$ 型と呼ぶならば、経験の対象の純粹概念と経験の対象との対応である。他の $\beta$ 型とは諸概念の綜合と経験的綜合とのそれである。

「経験的綜合としての経験は、自分の可能性において、あらゆる他の綜合に實在性を与える唯一の認識方法であるから、先天的認識としての他の綜合は次のことよつてのみ真理性（客観との合致）を有する。即ちかかる他の綜合は、経験一般の綜合的統一に必要なもの以外は何も含まないということ（B 196）。」かくすると先天的綜合判断の客観的妥当性は経験そのものに求めなくてはならぬ。求める方法は経験の綜合的統一に必要な条件が示すであろう、だがこのような条件は先天的綜合判断に他ならずこれに則つてのみ経験は成立する。個々の経験判断に真理性の根拠を求めることを拒否するなら、先天的綜合判断にこそそれを獲得させねばならぬ。だがこのことは与えられる質料を欠いて可能であるか。

あらゆる綜合判断の最高原理「すべての対象は可能的経験における直観の多様の綜合的統一の必然的制約に従属する（B 197）」を考察してみよう。この原理に言う「直観（単数である——筆者——）の多様の綜合的統一の必然的制約」は、先の $\alpha$ 型の対応が示すところである。可能的経験は更に $\beta$ 型をも要求するであろう。これを欠いては最高原理の名に相応しいと思われる。換言すればすべての対象は可能的経験の形式（それは命題であろう）においてのみその成立場所を得ると考えられるのである。

先天的綜合判断の可能性の条件は次の如く指摘することができる。

先天的綜合判断の可能性の二条件（B 197）

I. (1)直観の先天的形式的制約、(2)構想力の綜合、(3)統覚における構想力の必然的統一——、を可能的経験一般に関係させるこ

と。

Ⅱ. 「経験一般の可能性の制約は、同時にまた経験の対象の可能性の制約であり、従ってまた先天的綜合判断において客観的妥当性を有する」と言い得ること。

条件Ⅰを検討してみると、(1)は直ちに経験を指示する判断とはいえず、構想力とはそもそも《対象をそれが現になくとも直観において現す能力》であるから(2)も未だ判断とは呼び難い。(3)もまた対象成立の域を出ないであろう。これらが如何にして可能的経験なるものに關係し得るかが問題である。このように見てよいならば、Ⅱは次のような意味となろう——《経験一般の可能性の制約は先驗的对象の純粹概念を含む故に経験的对象の成立条件を含み、この限りで客観的妥当性を有する。》だが経験の対象の成立には質料を要する。これをどう解決するか。

#### 第四章 数学的原则

[1] 数学的原则と力学的原则 範疇がどのような先天的綜合命題を産むかの問題が原则の分析論の仕事である。

「諸々の悟性概念の可能的経験への適用においては、それら概念の綜合の使用は数学的であるかさもなければ力学的である。というのは、綜合は単に直観に關係するか或いは現象の現実的存在一般に關係するからである(B 199)。」直観の先天的制約は可能的経験に關して必然的であるから数学的原则は絶対確實性と直証性を有する、ところが可能的経験的直観の客観の *Dasein* に關する制約は単に偶然的であり、力学的原则が必然性を伴うのは経験的思惟の制約においてのみである、という。

悟性概念の綜合が「單に直観に關係する」場合、その直観とは純粹か経験的か。数学的範疇は経験的直観の対象にもかかわるのである(表3)。すると当然対象の *Dasein* に既にかかわっておらねばならぬ。しかし純粹悟性原则に算入されるところの「直観から概念へではなくて概念から直観へ進む原则(B 199)」が、先ずかわるのは純粹な

(表3) 範疇の二部門 (B110)

## I. 数学的範疇 (量と質)

直観 (純粹及び經驗的) の諸対象に關係する。

## II. 力学的範疇 (關係と様相)

諸対象の Existenz (対象の相互關係におけるか、さもなくば悟性に対する対象の關係における) に關係する。

(表4) 原則の二部門 (B 221~222)

## I. 数学的原則 (直観の公理と知覚の予料)

現象が直観と知覚の實在的なものとして産出される仕方を数える。(構成的原則)

## II. 力学的原則 (經驗の類推と經驗的思惟一般の要請)

現象の Dasein を先天的に規則に従属させる原則。(現象の Dasein は構成され得ぬ故に、その關係にかかわる reglative Grundsätze である。)

る形式的直観ではあるまいか。「純粹概念からではなくて純粹、直観から得られたために(尤も悟性を介してではあるが)、純粹悟性に独得のものとして帰することのできないような先天的純粹原則がある。だが悟性は概念の能力である。数学はこのような原則を持つのである。けれども数学の経験への適用、従って数学の客観的妥当性、更にはこのような先天的綜合的認識の可能性(その演繹)はやはり純粹悟性に基くのである(B 198~199)」。悟性が純粹直観から採用して再び演繹せんとする原則があるとすれば、取り込んだものを返却する当の相手は先ず純粹直観ではないか。そこから更に具體的經驗に如何にして妥当するかという問いを發し得ると思われる。「現象は空間或いは時間における直観であり、空間時間一般がそれによって限定されるところの同じ綜合によって表象されねばならない(B 203)」というけれども、数学的使用の原則が有する直証性は客観の Dasein にまで達しているか。他方力学的原則が必然性を伴うのは經驗的思惟の制約においてのみであって間接的であるという。つまり与えられる多様性に関しては悟性は必然性を語り得ないのではないか。このように見てよいなら、両原則は絶対確実性と蓋然性に関して運命を共にするといわなければならない。

(表5) 原則の絶対確実性と蓋然性

|           | 絶 対 確 実 性                                                                  | 蓋 然 性                                                                   |
|-----------|----------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| 数学的<br>原則 | 純粹なる形式的直観に関する限り絶対確実である。我々は数学を行えばよいのである。(純数空間における幾何学, かかる空間における限定方法の時間への導入) | 多様が与えられ而も数学に則して対象が成立するのは如何にしてか。かかる対象ありという承認, 即ち形式的直観と多様との同種性が想定されていないか。 |
| 力学的<br>原則 | 演繹の方向を採用して内感, 構想力, 統覚に基いて原則を先天的に立てる限り, 形式的必然性を有するであろう。                     | 経験判断の形式は原則に則る限りで必然的であろう。しかし判断の含む対象の Dasein に客観性を語ることには如何にして可能か。         |

〔2〕直観の公理 「経験的直観はただ純粹直観(空間時間の)によってのみ可能である。それ故幾何学が純粹直観に関して言うことは少しも矛盾なく経験的直観についても妥当する(B 206)。」このように言えるのは、直観の

公理の原則が次の前提のもとに行われる場合であろう。(1)純粹直観とは単に感性のみが有するものでなく、悟性の限定・統一を既に受容した「形式的直観」でなければならぬ。而もかかる直観と多様との同種性を想定せねばならぬ。(2)我々の表象の対象——経験的对象——が客観的に存在するものと解さねばならぬ。してみると「すべての直観は外延量である」ということは、純粹直観と覚知された現象とに関して言われることである。だが現象が純粹直観に則る理由を尋ねるならば再び同種性の想定に帰着するのではなからうか。

〔3〕知覚の予料と形而上学的仮定 感覚に対応するものは實在性、感覚の欠如に対応するものは否定性である。「感覚一般に対応する實在的なもの das Reale は、否定性即ち零とは反対に、その概念がそれ自身存在を含むところの或るもの etwas, dessen Begriff an sich ein Sein enthält だけを表象し、経験的意識一般における綜合のみを意味する(B 217)。」綜合たる限り悟性の操作でなければなるまいが、他方次のようにもいう。「経験的意識から純粹意識へと、一つの段階的变化が可能である、……従って感覚の量的産出の綜合も、その始まり即ち純粹直観＝零から、任意の量にまで達することも可能である(B 208)。」ここに言う純粹直観とは何か。

(表6) 虚空間と空虚

| 現象の有するもの<br>(知覚可能なもの)                         | 現象の有しないもの<br>(知覚不能のもの) |
|-----------------------------------------------|------------------------|
| 1. 外延量……「現象の直観<br>に関して (B212)」                | 1. 空虚な空間               |
| 2. 内包量……「単なる知覚<br>(感覚従って実在性) に<br>関して (B212)」 | 2. 空虚 (das Leere)      |

現象の外延量は「どのような質料においても或る空虚な空間を含まねばならぬ (B215)」と結論するのは形而上学的假定を基礎とするに過ぎぬ、この誤った必然性を除去するために次のことが承認されるのである。「等しい諸空間が異った質料によって質料のないところが一点も存しないように充実されることはできる、しかし各々の実在的なものは同一の質を持つけれども度 (抵抗或いは重さの) を有し、この度は外延量即ち集合量を減じることなく而も質か空虚 das Leere に移行して消失するまで、無限に小となることができる (B216)。」たとえば熱は空間の如何なる小部分も空虚に残さないので度を無限に減じ得るというのである。では質の達し得る空虚とはどんなものか。

「現象におけるあらゆる実在的なものの全き欠如」を直接にせよ間接的推理にせよ証明する経験は不可能である、即ち経験から空虚な空間時間の証明はできない。その理由は、(1)「感性的直観における実在的なものの全き欠如」は知覚できず度の区別からも推論し得ない、(2)一定の空間時間の直観全体は徹底して実在的である (如何なる部分も空虚でない)。しかしすべての実在性が有する度は空虚にまで減じ得るから、「空間時間が充たされるような無限なる度」が存しなければならぬ (B214)。してみると《実在的なもの全き欠如》は、物と並存するような虚空間と、内包量零なる空虚とを共に含む想定であると考えられる。「内感において経験的意識は零からそれより大なるあらゆる度に高められ得る…… (B217)」というから零に発する度の成立は内感においてである。かかる空虚を虚空間と同じく知覚不可能と見ることができると、度に関しても形而上学的假定が置かれていたのではないか。つまり空虚なる内感という前提である。

実在的なものに度の存することを認めるとそれは実在性、度であるか。「直観の同じ外延量 (たとえば照ら



された表面)が、(より少く照らされた)他のものの集合ほどの感覚を惹起する(B217)」のであるが、明かるい面も暗い面も実在的なものであることに相違はなく、両者の各々において悟性の行う統一に度は存するまい。「実在的なものは……その概念自身が一つの存在を含むところの或るもののみを表象する」のであって、非存在ないしそれと存在との中間段階を表象するのではなからう。現象における実在性と否定性(空虚な内感という仮定かも知れぬ)との間に連続的関連を見出すことから、物があるのでもなくまたないのでもない中間値を表象し得る如き考え方はできぬであろう、たとえ質の範疇に「制限性」ありとしてもである。逆に見れば質の範疇は原則に妥当な指示を与えていないと思われるのである。

## 第五章 力学的原则

〔1〕認識の《名辞先行型》解釈 経験とは「諸知覚によって一客観を限定する認識」即ち「諸知覚の総合」であつてこの総合そのものは知覚には含まれず(B219)、経験の類推の普遍的法則は統覚の必然的統一を基礎とする(B220)。このように考えれば、命題としての認識に先だつて知覚が名辞的に成立しているであろう。同じ立場が次のようにも述べられる。「経験の類推は(如何にして経験的直観一般としての知覚そのものが発現すべきかではなくて)諸知覚から現象の統一がそれに則つて発現すべきところの規則であろう……(B222)」ここでは諸知覚の発現が現象の統一の発現に先行するようと思われる。同じ事態をまた指摘できるであろう。経験的思惟一般の要請は「単なる直観 Anschauung の(つまり現象の形式の)総合、知覚 Wahrnehmung の(つまり現象の質料の)総合、および経験の(即ちそれら諸知覚 Wahrnehmungen の関係の)総合(B223)」にかかわる、というのである。知覚が現象の Materie という意味は知覚の発現に関していえば多様の総合であろう。だが経験の総合に関しては知覚は命題における名辞の役割を果すのではないか。

## 〔2〕認識の《命題先行型》解釈

このような見方は「あらゆる綜合判断の最高原理」において既に考察したところでもある。綜合の規則は自分のうちに直観を成立させるべきなのである——「或るものが現象において覚知される仕方、現象の綜合の規則が同時にこの先天的直観をあらゆる眼前の經驗的例において示し得るべく……先天的に表象されていることが可能である（B220）。」直観的对象の成立は力学的原則においてこそ意義を持つとする見方は、「諸概念の論理的普遍的統一との類推（B224）」に則って諸現象を結合する權利を認識成立の大前提とする考え方に連なるであろう。

## 〔3〕実体持続の原則

現象はすべて時間において存在し同時存在と継起は基体（内的直観の持続的形式）としての時間においてのみ表象され得る。ところが時間そのものは知覚できぬから、知覚の対象（現象）のうちに「時間一般をあらわす基体……が見出されねばならない（B224～225）。」かかる基体は実体である。「ただ持続するもののうちでのみ時間関係は可能である、……即ち持続的なものは時間そのものの經驗的表象の基体であり、この基体においてのみあらゆる時間限定は可能である（B226）。」かくて持続するものは知覚のあらゆる綜合的統一の制約である。あらゆる現象における持続するものは「（現象としての）実体」である。

現象としての実体は思惟された実体であるか。知覚の可能性の制約として知覚されぬ（と考えられる）実体を挙げ得るか。「持続的な或るものを実体の概念に対応して与えるためには（このことによってこの概念の客観的実在性を明らかにするのである）、我々は空間における（物質の）直観、eine Anschauung in Raume (der Materie) が必要である。何故なら空間のみが持続的として限定されており、時間と従ってまた内感に存するすべてのものとは常に流転するからである（B291）。」ここに言う直観は一体どんなものか。それは単に多様を与える形式ではなく、形式的直観に尽きるのでもなく、知覚でもなく、思惟——知覚から見れば推論であり悟性概念から見れば要求（演繹）であるところの——を内蔵した直観ではないか。実体の概念に対応した直観である。自己認識においては直観が感性

的な故にあるがままの我の認識は断念された。だが今や外なる実体の直観を持ち得ると主張するかに見えるのである。思惟された実体が現象としての実体のいわば形而上学的原型と思われる。これは「限界概念(B310)」ではなく、感性を予想しながらなおそれとの齟齬を有するのではないか。かかるものが感性的なる直観の場にどのようにして踏み込めるであろうか。直観の意味がここに大きく変ぜられねばなるまい。

[4]因果律の問題　これを考えるに当って我々は次の諸点を明らかにしておかねばならない。

# 実体と変化

1. 変化の概念……「変化 *Veränderung* とは、同一対象の別の存在の仕方 *eine andere Art zu existieren* へと継起するところの、一つの存在の仕方である (B230)」変化するものはすべて恒常的でありその状態のみが変易 *Wechseln* する。かくて「持続するもの(実体)のみが変化せられる (B231)」

2. 実体の前提……「諸現象の一切の変易は変化にすぎない、というのは、変化の概念は……同一主体を存在するものとして *als existierend* 従って持続するものとして前提するからである (B233)」

さて一軒の家を覚知するには上下左右いずれに始まり終わってもよいが、「出来事 *Begebenheit* のあらゆる覚知」に關しては、覚知において知覚の継起する順序は拘束されている。つまり覚知の主観的継起は現象の客観的継起から導出されねばならぬ。ところで客観は物自体でなく現象である、「現象において覚知のこのような必然的規則的制約を含むものが客観である (B236)」表象総括の規則が予め存する故に知覚の継起の規則性をはじめて説明され得るのである。

他方時間そのものの知覚不能なることから証明は行われる。前の時間が後の時間を限定することは感性の必然的規則である、しかし「絶対的時間 (B245)」は知覚の対象たり得ず、経験的時間表象は前の出来事が後の出来事を規定することによってのみ可能である。規則に従った現象の継起の制約となるのが因果律である。

ここで因果律は実体持続の原則に解消されるであろうか。「或るものが生起することは、可能的経験に属するところの知覚である。Daß also etwas geschieht, ist eine Wahrnehmung, die zu einer möglichen Erfahrung gehört. (B245)」何ものが生起することは単に名辞ではなくて命題のあらわすところであろう。これが知覚であるというからには知覚はただ一対象の成立を指すのでなく既に認識でなくてはなるまい。生起ないし変化の知覚は認識ではなからうか。

因果律の適用は不可逆的知覚の場合のみである。何故そうであるかは原則自身が示すであろう。「すべての変化は原因結果の連結の法則に従って生起する(第二版)」。知覚が不可逆的なのは変化そのものが既に必然的だからである。変化一般は実体と偶有性によって先天的に規定されるであろうが、具体的変化を知るには現実の知覚によらねばならない。経験とは「諸知覚によって一客観を限定する認識」である、してみると「経験の本質的なもの(B216)」は主観が知覚の総合として先天的に有するけれども、知覚を欠いて客観は限定すべくもない。若し我々は実体そのものを知覚できぬとすれば何を知覚し結合しているものであろう。

実体の持続及び変化が出来事であるなら、出来事の継起を基礎づける場合の因果律は実体持続の原則に基くものである。出来事というものをどのように解するか。

[5]同時存在の原則 覚知の総合が可逆的な場合に諸物が同一時間中に存在することを知り得るという。現象としての諸実体の多様性 Mannigfaltigkeit von Substanzen als Erscheinungen において、各実体が孤立しているならそれらの共在 *Zugleichsein* は可能的知覚の対象とはならない、「何故ならもし諸実体が全く空虚な空間によって分けられていとなると考えるなら、時間において一実体から他実体へ進む知覚は継起しているのか或いはむしろこれと共在する *Daß sein* を限定することはできないのである(B258~259)」。従って一者が他者に対した逆に時間中の場所を限定する制かを区別することはできないのである(B258~259)」。従って一者が他者に対した逆に時間中の場所を限定する制

約がなければならぬ。かかる時間位置を限定するものは「原因」だけである。かくて諸実体は力学的相互性という関係を持たねばならない。

諸実体が虚空間で隔てられているという仮定から証明は進められるが、その場合も知覚は一実体から他実体へ移行できると考えているようであるが、これは奇妙である。世界の外部に拡がるような虚空間は経験のかかわるところでないとすれば、虚空間（小なりといえども）を隔てた二実体は同様に我々の与り知らぬものであらう。虚空間の仮定そのものによって知覚に関する一切の議論は阻止されるのではあるまいか。従ってむしろ虚空間の想定が諸実体の相互作用や因果性と相容れないことを言わねばならないであらう。

相互性はここで共在 *communio* ではなくて相互作用  *commercium* 即ち力学的相互性  *dynamische Gemeinschaft* として用いられる。「この力学的相互性がなければ場所的相互性  *communio spatii*」すら決して経験的に認識され得ないであらう（B260）。空間のあらゆる位置において連続的影響  *die kontinuierlichen Einflüsse* のみが我々の感能を対象から対象へ導き得るのである（同）。だが場所的相互性は幾何学に基礎を置くとは言えないのか。空間における二円の認識が二つのまるい皿の知覚の基礎に存するのではないか。「幾何学が純粹直観に關して言うことが少しも矛盾なく経験的直観についても妥当する（B206）」のでなければならぬ。そうでないなら純粹直観なるものに意味がない。

ヒュームが哲学的関係としていう「隔たり、近接、上、下、前、後というような、数限りない比較の源泉たる空間時間の関係（『人性論』第一篇第一部第五節）」は、力学的相互性がなければ成り立たぬであらうか。これがなければ知覚の移行が不能というなら、これといわば幾何学的相互性はどんな関係か。

共在と相互作用に關して次の叙述がある。「我々の心性においてあらゆる現象は、可能的経験に含まれるものとしては、統覚の相互性（共在） *Gemeinschaft (communio) der Apperzeption* において存しななければならない。そし

て諸対象が同時存在的に結合されたものとして表象されるべき限りは、それらは一つの時間において自分の位置を交互に限定し、それによって全体を構成せねばならない。この主観的相互性が……実体としての現象に関係づけられるべきならば、一、実体の知覚は根拠として他の実体の知覚を可能にし、また逆も可能でなければならぬ。このことは、覚知としての知覚に常に存する継起が諸客観に帰せられんがためにではなくて、諸客観が同時存在として表象され得んがためである。これはしかし……諸実体の実在的相互性（相互作用）である。これなしには同時存在の経験的關係は経験において起り得ないであろう（B261）。」この議論は左表記の如く逆に辿ることができる。

#### 実体の相互作用と経験

1. 実体の相互作用は原則として経験の根拠である。
2. この原則に基いてのみ、諸客観が同時存在として表象され得る。
3. 《諸対象が同時存在的に結合して表象され全体を構成している》という主観的相互性は、2に基礎を置く。
4. 従って知覚の可逆的継起が可能となるのである。つまり同時存在の経験が成立するのである。

原則と経験を結合するものは何か。それは実体の知覚である。これが不可能ならば結合は成立しない。知覚の移行は経験として同時存在を立言する、これを可能にするのが諸実体の相互作用である。諸々の実体を知覚することは相互作用をも知覚することにならぬか。更に、統覚の相互性は共在ということに尽きるなら、即ちあらゆる現象を統覚が相互作用において統一しないなら、諸実体の相互作用を主張するのは何者であろうか。

統覚の相互性（共在）はいわば論理的共在（悟性の論理機能）をも意味すると考えられる。否むしろ範疇の生成はそもそもかかる共在から発したのではないか。このような相互性には、カントに従えば純粹空間が直観として対応するのではないか。統覚はあらゆる経験に先立って空間一般に関係する、というのである。「空間の記述としての運動は、外的直観一般において、産出的構想力が多様を継時的に綜合する純粹作用である。従ってそれは幾何学に属する

(表7) 「結合」の分類

|            |                                  |                                                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                                                          |
|------------|----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| カントの「我」と経験 | 結合<br>Verbindung<br>(conjunctio) | entweder :                                                                                                                                                                           | (a) 外延量に関する集合<br>Aggregation                                                                                                                                                             |
|            |                                  | I. 合成 Zusammensetzung<br>(Compositio)<br>相互に必然的關係を有しない<br>多様の綜合。数学的なもの<br>における同種的なものの綜合は<br>これに含まれる。                                                                                 | (b) 内包量に関する合同<br>Koalition                                                                                                                                                               |
|            |                                  | oder :                                                                                                                                                                               | (c) 現象相互の物理的結合<br>die physische der Erscheinun-<br>gen untereinander<br>(Subsistenz と Inhärenz はこ<br>こに位するであろう (筆者). )                                                                   |
|            |                                  | II. 連結 Verknüpfung<br>(nexus)<br>相互に必然的關係を有する限<br>りでの (偶有性の実体に対す<br>る, 結果の原因に対する如<br>く), 即ち同種的でないが先<br>天的に結合されたものとして<br>表象される限りでの, 多様の<br>綜合。任意的でなく多様の現<br>実存在の結合に関係する故に,<br>力学的である。 | (d) 先天的認識における現象の形<br>而上学的結合<br>die ihre metaphysische Ver-<br>bindung im Eekenntnisvermö-<br>gen a priori<br>(Substanz と Akzidens はここ<br>に位置づけられるであろう。<br>また力学的原則はここまで達<br>しているか (筆者). ) |

ばかりでなく先驗哲学にも属する (B 156ff.)。」「という運動が先在する空間表象においてなされるなら、知覚移行の可能性は統覚の共在に求め得ないか。尤も、部分の表象が全体の表象を可能にするような外延量をそもそも成立させるのは何であるかと問うならば事態は別である。

〔6〕経験の類推の検討 実体間の相互作用によって「諸現象は互いに離れていて而も結合している限り、一つの合成体 ein Zusammengesetztes (実在的合成体 compositum reale) を成している。そしてこのような合成体は様様の仕方である。それ故他の一切の關係がそこから発するところの三つの力学的關係は、属性 Inhärenz、帰結 Konsequenz、合成 Kompositionの關係である (B 262)。」そこで実在

的合成体の形成される仕方を検討すれば三つの力学的関係を理解する手懸りが得られるであろう。「結合」というものをカントに従って(B201<sup>註</sup>)表7にあらわし筆者の考えを加えてみると、Ⅰは数学的結合といってよくⅡは彼のいう如く力学的結合である。「諸現象が互いに離れていて而も結合」される原動力は何処から来るか。「他の一切の關係」が二つの力学的關係から発現するならば、数学的な同種の綜合もそこから発現するか。そうである(力学的原則が数学的の原則に対して優位に立つ)と解される一つの傍証は、力学的原則が「量としての時間(B262)」を成立させるということである。「経験の三つの類推は、時間の三つの様相に従って時間における現象の現實存在 Dasein を限定する原則に他ならない。三つの様相とは、量としての時間そのものに對する關係(現實存在の量即ち持続)、系列としての時間における關係(繼時的)、そして最後に一切の現實存在の總括としての時間における關係(同時的)である。時間限定のこの統一は徹底して力学的である、即ち時間は、経験がそのうちであらゆる現實存在にその位置を規定するようなものとはみなされないものである(B263)。」

時間を表象するのは線の形式によってのみ可能であり(B156)、時間を思惟するのは直線を引く際に内感の連続的限定の働きだけが注意される場合である(B154)。では「量としての時間そのもの *die Zeit selbst, als einer Größe*」と持続 *Dauer* とはどんな關係にあるのか。前者は線として表象された時間(空虚な時間)に他ならず後者はそれに対応せねばならぬ、とするなら実体持続の原則はいわば絶対時間の表象からの演繹に従うことになる。時間の思惟とは悟性の連続的限定の働き *Handlung* の意識に他ならずこれこそ持続である、而もこの働きは空虚な内感からも空間からも得られるのでなく専ら外なる *etwas Beharrliches* を俟たねばならぬ——かく言い得るならば持続は量としての時間の成立に先行する。これは「觀念論論駁」の主張するところでもある。同様にして「系列としての時間」も「一切の現實存在の總括としての時間」も、決して空虚な時間を基礎として言えることではなくなる。同じような考え方が空間と物との間にも成り立たないか。つまり外的直観の第一義的意味は最早純粹空間ではなくて実体の直観で



ある。(このことは空間の中に物を見えるというより物の中に空間を見えるというベルグソンの立場を彷彿させる)。実体及びその状態の結合があらゆる関係の源泉というのであれば、力学的関係が優位に立つてであろう。時間の統一の根柢には力学的結合が存すると考えるならば、時間の諸部分が等質か否かの問題をも惹起するのではないか。時間の諸部分が相互に等しいと確認することはできぬ、とロックも言うのである(『人間悟性論』第二巻十四章二十一節)。ともあれ問題の核心は実体の直観に存する。

さて実体 Substanz に対する偶有性 Akzidens は「実体の特殊な存在の仕方 die besondere Arten derselben zu existieren に他ならぬところの、一実体の諸規定(B229)である。また偶有性を「実体の現実存在 Dasein が積極的に限定されている仕方(同)」でのみ表示するならより適切であるという。他方自存性 Subsistenz とは「実体の現実存在 das Dasein der Substanz」であり、これに対する属性 Inhärenz とは「実体における現実的なものに(たとえば物質の偶有性としての運動に)」付与された「特殊な現実存在」である(B230)。このように見えてくると三つの力学的関係の第一のものは実体の Dasein と偶有性の Dasein とを問題とするのではないか。すると実体―偶有性は現象相互の結合を超えて「形而上学的結合」に位するのではないか。属性が特殊な現実存在であるというのはどんな意味か。

物の可能性には範疇及び外的直観の二条件を要する(B291)。この事情が関係の範疇を例として示される。――実体の概念に対応しては「空間における(物質の)直観」を要する。因果性の概念に対応する直観は変化であり、このことを表現するには空間中の変化たる運動を採用する以外にない。「変化とは、同一物の Dasein において相互矛盾した諸限定を結合することである。」これは「空間における点の運動の直観」を欠いては理解することもできない。相互性の範疇に関していえば「若しも(現象としての実体の)相互性を空間において、従って外的直観において表象するならば、我々はこの相互性の可能性をきわめて容易に理解できる。何故なら空間は既に先天的に形式的外的関係

を実在的関係の制約として含んでいるからである (B293)。」

かかる叙述を前にして、カントは純粹空間の優位を認めるのか、それともそれを認識不能として実体の直観を第一義的直観とするのか判定は容易でない。実体の概念に対応する「空間における(物質の)直観」は、概念の客観的実在性を十分な意味で証拠だてねばならぬとすれば、実体の直観と考えられる。範疇によって物の可能性を理解 *verstehen* し外的直観によって範疇の客観的実在性を証拠だてる *darum* (B291) というのである。ここで類推の二義性を想起せねばならぬ。(1)所与の三項から先天的に認識されるところの、第四項に対する質的關係を求める類推 (B222)。(2)概念の論理的普遍的統一との類推 (B224)。論理性に徹せんとすれば形而上学的諸項及びそれらの関係に携り経験に則せんとすれば知覚を超え得ない。且つ経験が範疇に従うとすれば実体から自由でない。いま範疇表そのものを顧れば、*„Inhärenz und Subsistenz (substantia et accidens)“* が見出される。これは純粹悟性概念たんとするのか(実体)、既に実体の現実存在たんとするのか(実体の直観)。或いはまた概念と直観の密かな同一性を示唆するのか。論理性に徹するなら我々は次の諸段階を経る——(1)主語と述語、(2)形而上学的関係 (*Substanz—Akzidens*)<sup>\*</sup> (3) *Subsistenz—Inhärenz* の関係。(3)は *Dasein* を問題とする故に直観を含む。範疇は(2)と(3)に跨っているのである。「関係概念 *Verhältnissbegriffe* は直接に与えられた物を前提し、これがなければ可能ではないのである (B340)。」純粹悟性概念はむしろ感性の捨象において成立するとさえ考えられる。この問題は「先験的場所論」において考察する。変化の理解は空間における点の運動の直観による以外にないというが、このことを因果性の概念の客観的実在性を考えるに当って採用すれば、実体の概念もそれに対応する直観も姿を消している。《物質(実体)の運動の直観》が何故登場しないのであろう。変化を右の仕方で表し得るなら、内感限定もまた「線を引くこと(運動)によって (B292)」なし得るのではなからうか。

相互性の範疇に關しては何を理解すべきか。空間は《先天的に相互作用の形式的外的關係を含む空間》となつてき

たのである。このような関係を究明せねばならない。

[7] 先験的場所論と範疇 概念が感性と悟性いずれの認識力 *Erkenntniskraft* に属するか（先験的場所）の判別を指示するのが「先験的場所論 *die transzendentale Topik* (B324)」である。これが範疇と異るのは「対象がそれを構成するもの（量、実在性）によって表わされるというのではなくて、物の概念に先行する諸表象の比較が物の一切の多様性において表わされる (B325)」という点である。かかる比較を行うのが先験的反省——「諸表象が相互に比較されるのは純粹悟性に属するものとしてか或いは感性的直観に属するものとしてかを判別する働き (B317)」である。抽象作用に基き直観のあらゆる制約を捨象する場合には単なる概念において残るものは、(1) 内的なものの一般 *das Innere überhaupt*、(2) その相互関係、の二者だけである (B341)。しかし物が「内的なものを基礎に持たず単なる関係だけを表すような限定」と共に直観に与えられる場合には、右の抽象作用による必然性は物には当てはまらない。物は物自体でなく現象だからである (B341)。

### 「物」と「関係」

- (1) 「物質は現象の実体 *Substantia phaenomenon* である。……私が知るものは直に内的なもの *Schlechthin—Innerliches* ではなくて比較的に内的なるもの *Komparativ—Innerliches* である。これはまたそれ自身外的関係から成りたつ (B338)。」
- (2) 「空間における持続的現象（不可入の延長）が全く関係であって、直に内的なるものを少しも含まないにも拘らず、而もあらゆる外的知覚の第一基体たり得ることは明らかである (B340)。」
- (3) 「我々が物質について知るところは単に関係である（我々が物質の内的限定と呼ぶものは、単に比較的に内的なるものである） (B341)。」
- (4) 「物 *ein Ding* は全く関係から成立せねばならぬ、と聞けば人は非常に意外に思うが、しかしかかる物はやはり単なる現象であって純粹範疇によつては決して思惟され得ない。かかる物は或るもの一般 *Etwas überhaupt* の感能に対する単なる関係に

おいて存するのである (B34)。」

現象の有する関係、を右の如く考察すれば、(1) (3)は外的、対等的関係といえる。(4)は「先験的客観」ないし「先験的質料」と感能との連鎖において物が成立することを主張するもので、今問題とする関係とは別の見方が必要であろう。物は絶対的に内的な限定ではなくて外的関係を優位として成り立つと考えられるならば以下の結論と問いとを産み出すであろう。

先ず先験的場所論は、「概念から直観へ進む原則 (B199)」とは逆に、「直観から概念へ」進むことを我々に要求する。「物の概念に先行する、諸表象の比較 *die Vergleichung der Vorstellungen, welche vor dem Begriffe von Dingen vorhergeht* (B325)」は感性の場所で行うしかないであろう。純粹概念からではなくて純粹直観から得られた故に、悟性独得のものとはいえない「先天的純粹原則」があるというのである (本稿第四章<sup>[1]</sup>)。先天的認識の演繹の妥当性より前に、原則そのものの成立において《感性から悟性への道》を検討せねばなるまい。勿論原則を直観から採用するのは悟性である、しかし原則の成立は単に悟性によるのでもなくまた感性のみがなし得るのでもない。「我々自身の心性において我々の感性の根源の秘密がよこたわっている (B334)」のである。だが敢えていうならば直観から概念へ進む論理が立てられねばなるまい。そうでなければ先験的場所論は感性においては孤立し、また演繹の基礎は定まらない。

「我々が単なる概念だけを扱うなら、物の抽象的關係というものを、二つのものが他のものにおける限定原因である」という如くに考えるしかない。何故ならこのことが関係そのものの悟性概念だからである。しかしかくすれば直観全部が捨象されるので、多様が相互にその位置を決し得る唯一の方法、即ち感性形式(空間)は失われるのである…… (B341)。」では失われた空間を回復させてみればどうなるか。一滴の水が「同時に異った場所で直観される (B319)」のは、空間そのものの示す数的差異性によるというのである。この差異性が関係そのものの悟性概念に結

合されるなら、一つの空間が他の空間の限定原因である、ということになるか。ここで限定する空間と限定される空間が問題となる。

空間の諸部分は同時的である故に集合をなすが系列をなさない、「空間の一つの部分は他の部分の可能性の制約ではない」(B439)。<sup>1</sup>しかし空間の多様な部分を覚知する綜合は繼時的であり従って時間において生起し系列を含む。

「空間の部分は他の部分によって与えられるのではなくて単に限界づけられる」故に、すべての限界づけられた空間は他の空間を限界の制約として前提する、とみななければならない(同)。

けれども右の事態は空間の諸部分は既に与えられているということを意味しないか。何故なら一空間は他の空間を与えるのではなく限界づけるのみだからである。限界づける空間を見るのは無制約者を求める理性の眼である。しかし限界づけられた空間は逆にまた限界づける空間を限定するのではないか。空間の綜合は真に「背進的」であるか。かかる背進を可能にする唯一の拠り所は諸項が系列をなすことであり、系列を問題とできるのは「時間において生起するところの綜合」があるが故である。空間の諸部分の綜合が時間において生起するというのは、三段論法が時間において行われるから時間的であるというに等しくないか。かかる綜合が時間的であるといえないならば系列は崩壊する、また諸空間の限定被限定は一方的でなく相互的であるなら系列を見出すのは困難であろう。系列をなすような空間は如何にして《先天的に相互作用の形式的外的関係を含む空間》となり得るか。理性と悟性のかかわりの問題は稿を改めて考察せねばならぬ、ただ次の点を指摘することはできる。——理性の理念は「現象の解明 die Exposition der Erscheinungen (B443)」を指して絶対的総体性を求める、けれども理念は現象を超越するのでなくて「全く感性界だけに關係する(同)」ものといえるか。制約する空間は既に現象の外部に想定された空間となっていないか。制約被制約の關係において空間を綜合することは悟性を見る現象をあらわにする exponieren ことになるか。逆にいえば理念の成立そのものの成否を問い得るのである。

物の外的關係を優位に見るとき、第二の問題は次の事柄である。即ち認識の根幹は關係の命題に存する、而も關係項は命題においてのみ意味を有し且つそれ自身またどこまでも外的なのである。「私が知るのは……比較的に内的なるものである（前出「物と關係」の表(1)）」してみると「現象としての実体」というのも比較的に実体的なるものではないだろうか。直観の制約がすべて捨象されるとき單なる概念において残るものは、内的なるもの一般とそれの相互關係だけである（B311）というが、感性の場所から分離された「内的なるもの一般」は再び物に則してみれば同じく比較的に内的なるものではないか。このことはロックの考え方に似る。彼は『人間悟性論』において次のようにいうのである。關係は事物の實在に含まれず外的で添加されたものであるが、その觀念はしばしば実体の觀念より明晰判明であり（第二卷二十五章八節）、真なる知は二觀念の一致不一致に存する故に觀念自体の明瞭か否かに存しない（第四卷二章十五節）。關係及び実体に関する考え方はロックとカントでは異なるであろうが、認識が外的關係優位において考えられるならば、カントのいう現象としての実体も絶対的に確かなものではなくるのである。

実体と偶有性は系列をなさぬとして次のようにいう。「実体に関していえば偶有性は元來実体に従属するのではなくて実体そのものの存在する仕方である。この場合先驗的理性の理念であるかのようにみえるものがあるとすれば、それは実体的なものの概念、der Begriff von Substantialeであらう。けれどもその意味するところは存立する對象一般の概念に他ならない、ただしこの對象によつては一切の述語を持たぬ先驗的主観のみが思惟される限りにおいてである（B411）。」先驗的主観は実体とは言い得ず実体的なるものに止まるであらう、それは我々が知的直観を欠く故である。それならば物に關してもまた事態は同じではあるまいか。つまり外的現象は純粹概念としての *Substanz* ではなくて *Dasein* の問題を孕む *Subsistenz* だからである、この点は既に考察したところでもある。

## 第六章 認識能力

様相の範疇はそれの付加される概念を客観の限定として増大させることなく、単にその概念の認識能力 *Erkenntnisvermögen* に対する関係を表現するに止まる (B266) という。だが認識能力というものを名辞先行型とみるか命題先行型とみるかによって、可能性・現実性・必然性は異った仕方と考えられるであろう。経験的思惟一般の要請は、単なる直観 (現象の形式) の総合、知覚 (現象の質料) の総合、経験 (それら諸知覚の関係) の総合にかかる (本稿第五章[1]) というのであるが、これら三つの総合に可能性・現実性・必然性はそれぞれ対応するのであるか。

範疇は(1)「可能的経験 *mögliche Erfahrung*」および(2)「認識の諸対象がそのうちにおいてのみ与えられるところの、可能的経験の総合的統一 *deren synthetische Einheit, in welcher allein Gegenstände der Erkenntnis gegeben werden (B267)*」に関係せねばならぬ。これは命題先行型の認識解釈である。つまり対象の可能性は経験一般の形式 (命題) においてのみ考えられるべきものとなる。だがこの形式たるや統制的である。統制的原則がそれのものと構成的原則を如何にして従わせ得るか。

[1]可能性 「物の可能性の要請」は、物の概念が経験一般の形式的制約に調和することを要求する。概念が客観的実在性を持つための条件は二つである、(1)概念が論理的に無矛盾であること、(2)空間における概念の構成即ち空間の制約に基くこと (B268)。しかしこれらは主語概念だけに対応する直観の形式的制約であらうし、可能なる物が単独で意味を持つなら「経験一般の形式的制約に調和する」必要はない。これら二条件で十分であるとは考えられない。「未来を(単に推量するのではなく) 予め直観する」能力等の概念は、その可能性の根拠を全く有しない、「何故ならこれらの概念は経験にも経験の既知の法則にも何ら基礎づけられ得ない。経験とその既知の法則を欠くのでそれらは任意的な思考の結合であり、矛盾を含まないけれども客観的実在性……に対して如何なる要求もすることはできない。……実在性は経験の質料たる感覚にのみかかわり得るもので、関係の形式にはかかわらないのである (B270)。」ここに第三の《質料的可能性》が加えられる。

そもそも「可能的経験」なる具体的な一命題が存するわけではない、それは丁度後に道德律が具体的命題で示されないのと同じである。可能的経験なるものは質料に関する具体的制約を尽すわけではないからまことに形式的なのである。それだけで満足するなら、現象界は延長している、といった類いのものに終り具体的認識の拡張など考慮の外となる。「始まり、原理、即ち最初から絶対者 das Absolute」といわれるようなものは、一般的なるものにすぎない。

私があらゆる動物とやうにしてもこの語は動物学に当ることができないのではない……（ヘーゲル『精神現象学』序文）。「質料的可能性は、「関係の形式」に頼るのでないとすれば何を抛り所とするのか。知覚の予料にしても、如何なる感覚が与えられるにしてもそれは内包量を有するといえるかも知れぬ、しかし如何なる感覚が与えられ、また与えられないかを予め知することはできないであろう。カントは可能的なものに何かが付加されて現実的なものが成立するとは考えられぬという。単なる直観形式の綜合によって成立する空間形式は《単に可能でしかないもの》に尽きるであろう。先にみた二条件に第三の条件が加えられて現実性へと移行するのではなくて、可能性の要請はいわば孤立しているのである。

〔2〕現実性 物の現実性に関する要請は知覚を要求するが、必ずしも対象の直接なる知覚でなくてよい。「もしも物の Dasein が、いくつかの知覚の経験的連結の諸原則（類推）に従って、いくつかの知覚に関連してさえおれば、その物の知覚に先だって——それ故比較的先天的に、その物の Dasein を認識できる。何故なら、その場合には物の Dasein は一つの可能的経験における我々の諸知覚と関連し、我々は類推の手引きによって現実の知覚から可能的諸知覚の系列における物にまで達し得るからである（B273）。」引きつけられた鉄粉の知覚から磁気物質の存在を認識する如くであり、この物質を直接に知覚できないのは我々の感能の粗雑の故であり、「可能的経験一般の形式」とは無関係である（同）。

認識が不全なのは統制的原则に欠陥ある故ではなく、先天的諸命題に従うべき対象の製作が粗雑なのは専ら感能



(構成的原則に則るべき)の責任である。——では感能を指導すれば具体的認識は完成するか。「もし我々の感能がより精緻 *feiner* であつたなら、一般に我々は感性の法則と経験における諸知覚の連絡に従つて、磁気物質の直接なる経験的直観に遭遇するであろう。それ故経験的法則に従つて知覚とその連絡とが達するところには、物の *Dasein* の我々の認識も達するのである (B 273)。」感能をより精緻にするということは、磁気や電気をみる、ことができるようになると仮定することか。我々の感能の性質までは変更できぬとすれば、そのことは仮定の域を出ない。精緻にするとは、たとえば視覚に關していえば、精々光学器械の使用しか我々にはないといえぬか。つまり感性の同質的、拡張のみが我々の経験的直観の直接なる証言であろう。可能的知覚は、類推と感性の拡張とによつて現實的知覚となり得るものに尽きず、どこまでも知覚を拒否する《推理された知覚》をも意味するであろう。

[3]必然性 必然性の要請がかかわるのは *die materiale Notwendigkeit im Dasein* であつて、概念の連結における單なる形式的論理的必然性ではない。存在 *Existenz* の必然性は概念からではなく、知覚されるものとの連結からのみ、経験の普遍的諸法則に従つて認識され得る (B 279)。

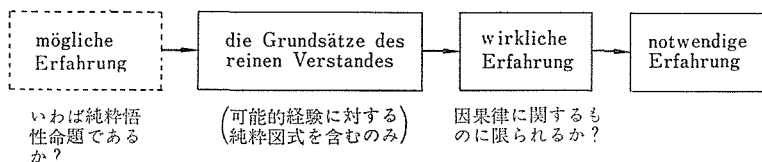
必然性の要請のかかわるもの (B 279~280)

- (1) 他の与えられた諸対象のもとで必然的として認識される *Dasein* は、因果性の法則に従つた所与原因から生じた「結果の *Dasein*」だけであらう。
- (2) 従つて我々が必然性をそこからのみ認識できるものは、「物(諸実体)の *Dasein*」ではなくて「物の状態の存在」である。
- (3) *Dasein* における必然性の表徴は可能的経験の範囲を超えず、この範囲においても「実体としての物の存在 *Existenz*」には通用しない。実体としての物は経験的結果とはみなされ得ない。
- (4) かくて必然性のかかわるのは次の二者である

① 因果性の力学的法則に従つた諸現象の關係、

カントの「我」と経験

(図2) 認識能力の進行



② この関係に基づいて或る所与の Dasein (Ursache) から他 Dasein (Wirkung) を推論する可能性。

必然性のかかわるものは上記の如く二者である。すると必然性の要請にいう「経験の一般的制約」とは因果性の原則を指すに他ならない。これに限る理由はいくつか考えられる。(1) 実体ないし物が何故に存在するかを必然的に示すことは悟性の関与するところではない、(2) 因果律を以て経験一般を集約的に表現せんとするからであらう——「生起するものはすべて仮言的に必然的であるということか、世界における変化を、一つの法則に、即ちそれを欠いては自然さえも存立しないような、必然的存在の、規則に従わせるところの原則である (B380)」。必然性のかかわるのは諸物(実体)の現実存在でなくて諸物の状態のそれであるとするのは、実体の問題を或る仕方回避することである。つまり類推を論理の方向でなく外的関係の方向に徹底することである。而もこの場合に質料的必然性とは何を意味するであろうか。

[4] 認識能力 命題先行型で認識を考察したのは力学的命題の優位を表現するためである。あらゆる総合判断の最高原理「すべての対象は可能的経験における直観の多様の必然的制約に従属する (B197)」からして、そのことを表現する。経験(それが最終的に諸知覚の総合を目指すなら力学的命題である)においてのみ対象は成立し得る。直観の多様の必然的統一(数学的原則の与えるところであらう)は経験の形式に従うのである。

かかる見地に立てば、認識能力なるものは可能的経験から必然的経験への進行である

と解されないか。但しその進行が問題である。純粹悟性の諸原則は、構成的であれ統制的であれ、「いわば可能的經驗に対する純粹図式 *das reine Schema zur möglichen Erfahrung*」を含むだけである (B296)。」力学的原則の示すところが諸現象の統一としての經驗を与えるとするれば、三類推が經驗の三つの「純粹図式」である。ではかかる図式と結合されるべきものが先在するか。三つのいわば純粹悟性命題が存し、それが可能的經驗の形式を示すのであるか。図式を欠いた純粹範疇 (左記に見る如く論理的表象となっている) は經驗に対して意義を持たぬなら、類推 (すべて時間限定を内蔵して成立している) の欠如した可能的經驗なるものも亦然りである。

#### 関係の範疇と時間 (B300~302)

1. 実体 *Substanz* の概念から持続性 (あらゆる時間における *Dauern*) を除けば、残るのは主語という論理的表象だけである。
2. 原因 *Ursache* の概念から時間 (そこにおいて或るものが他のものに規則的に継起する) を除去すれば、純粹範疇に残るのは、*他の或るものの *Dauern* をそこから推論できるところの或るものがある* ということだけであろう。
3. 相互性の概念に関していえば、実体の純粹範疇も原因性のそれも客観を限定する説明を少しも許さぬから、実体の相互関係における相互原因性もまたこのような説明はできない。

.....

三範疇から除去されるものは先験的時間限定たる図式である。否図式を欠如しては範疇は最早範疇たり得ないであろう。残存するのは論理的判断の表象のみであろう。(だがよく言われる如く第三のものが選言判断となるか否かは疑問である。逆にいえば相互作用は悟性の純粹な論理機能のみから導出され得るか。)

論理的判断の表象というに尽きるような『*可能的經驗の形式*』を立てないならば、次の如き表現が許されるであろう。『あらゆる対象は直観の多様の必然的制約によってのみ成立し、三類推に従属する。』このことが可能的經驗なるもの (經驗の最高形式) を表わすのではないか。あらゆる綜合判断の最高原理が『可能的經驗』を内に含んでいるの

は却って奇妙であり、最高原理は即ち可能的経験ではあるまいか。純粹悟性の諸原則（数学的原則および類推）は、雲を暈して月を描く如くに可能的経験を表現する。

「或るものが生起するということは、一つの可能的経験に属する一知覚である、この可能的経験は、私が現象を時間におけるその位置に関して限定されたものとして——従って一つの規則に則って諸知覚の関連の中に常に見出される客観として——みなす場合に、現実的となる（B245）」かくすれば可能的経験は第二の類推の表現するものに限られる観がある。即ち次のようにも言うのである。「可能的経験の法則」とは「生起するすべてのものは現象におけるその原因によって限定されている」ということである（B280）。因果律に限るならば、物体は重いという如き「二表象が客観において im Objekt 結合している（B142）」経験判断は、可能的経験の現実化とは言い得ないのか。右の制限を設ければ現実的経験と必然的経験に区別はなからう、けれどもそのために Substanz-Inhärenz に関するものが漏れるのではないか。因果律は実体の問題を内含し相互作用もまたそうである。実体の状態が変易する原因はその先行状態のみでない。氷が水になるにはたとえ熱い石が必要であり結果の限定には相互作用もまた関与するであろう。相互作用は諸実体の状態の Dasein に関して言われることであるなら、諸実体の関係はどうなっているのか。左記に考察する如く《実体の形而上学》が立てられているのではないか。

### 現象体、可想体、実体

1. 我々は或る対象 Gegenstände を（その性質自体からそれを直観する仕方と区別して）現象体 Phänomena と呼ぶ。

だが我々の概念において in unserem Begriffe 次のことが存する。この同じ対象を（①その性質自体に従ってか、②さもなくば感能の客観でない他の可能な物を単に悟性によって思惟された対象として）、可想体 Noumena と名づける（B306）。

2. 悟性は物自体を可想体と考えることにより、感性によって制限されるのではなくむしろそれを制限する。だが悟性は直ちに次の自己制限を行う。物自体はいかなる範疇によっても認識されぬ、従って知られざる Etwas の名のものでのみそれを考える

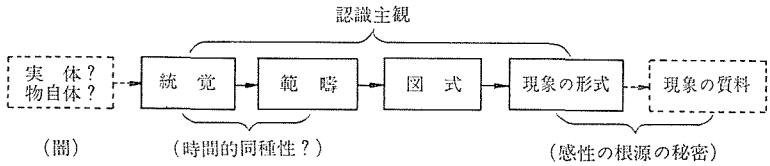
(B312)°

3. 感性は物自体を直観しないから悟性は感性を制限する。範疇は物自体に通用しない故に悟性は自己を制限する。してみると可想体をそこにおいて想定する「我々の概念」は範疇ではない。悟性の自己制限を超えんとする概念である。従って実体 *Substanz* の概念は現象体に結合すべき概念である。だがこの結合に問題がある（第五章[3]、表13等）。即ち次の三者から成る《実体の形而上学》が、いわば現象体から分離され物自体の「*Ontologie* (B303)»に対峙して、存するのではないか。①純粹範疇（論理的表象）、②先験的時間限定（時間における持続性）、③先験的空間限定（先験的場所論の純粹化が許されるならば幾何学である）。だが③は空間における「数的差異性」を感性から採用するのであり、直観から概念への道を残す（第六章[7]）。《実体の直観》を現象体において立てるとき、上記の如き実体と「現象としての実体」の間に齟齬を生ずることはないか。更に前者の実体は *Ontologie* にかかわらない——単なる思维の対象ではない——と如何にして言えるか。時間空間にかかわるからである、ということが唯一の理由であるか。

諸実体の關係を考えるに、*Substanzen in Gemeinschaft* は「単なる集合であつて一系列のいかなる指標をも持たない」(B441) ところと「*Gemeinschaft* は単なる共在を思わせるのである。」「統覚の相互性（共在）*Gemeinschaft* (*communio*) der *Apperzeption* (B261)」が、如何にして諸実体の實在的相互性（相互作用）に、更には「主観的相互性（同）」即ち諸対象の同時存在の經驗に、結合されるか。この問いは範疇の生成そのものをも問うのである。

可能なる物を、主語概念に（名辭先行型の認識において）第三の質料的可能性が付加されるという仕方で考えるなら、それは孤立し、氣ままに描かれた空間形象や任意的な思考結合に関する空疎な判断を産むのみである。しかし經驗の形式における可能的知覚と考えるとき、それは常に現實的知覚を關係項として持つ。類推がその現實化を保証するのである。してみると先天的認識の形式という見地から見限り、可能性・現實性・必然性の間に區別はない。質料的必然性というのも、質料の与えられる形式的必然性を意味するに他なるまい。質料が与えられることに關して

(図3) 主観の構造



は、やはり感性の秘密が残るのである。

自己認識と外的経験を考察して生じた幾つかの問題を顧れば次の如くである。

(1) 同種性の問題。範疇—図式現象の間にカントは同種性を立てる。このことは現象の形式と質料との同種性の想定につながるであろう。この想定が許されるなら「物自体」は——或る対象の性質自体 (B306) としては——感性を一切拒否するとは考え難い。先づ時間的同種性には (綜合の働きを継時的とみなして自己認識を考えたり空間に系列を語るような場合) 悟性にまで及ばされていないか。統覚の論理性こそ認識の根源とするならば、それは認識の自由なる第一原因かも知れずいわずに境界命題を構成する。だが先験的場所論によって感性を堅持するなら空間の「数的差異性」を認めねばならぬ。ここに直観から概念への道を残す。

(2) 直観の問題。直観は様々に解される——①単に多様を与える純粹形式、②悟性の限定を許容し表象の統一を与える形式的直観、③実体 (物) の直観。②と考えるとき純粹悟性概念の演繹は純粹な時空の演繹へと継承され、認識の先天的形式的基礎を固めて質料を従わせる。だが③とみる場合には、「觀念論論駁」に言う持続的なもの、実体持続の原則が示さんとする「時間一般を表す基体」等である。知覚に先立って、且つ知覚を超えて実体の世界が樹立されていないか。

(3) 主観の構造。認識主観は闇と秘密に遮られている。闇とはあるがままの「我」が認識できぬことであり、秘密とは「感性の根源の秘密 (B334)」である。デカルトにもこれらのものが潜まぬとは言えず、ロックが單純觀念の成立の際に心の受動性を説くときまた秘密が存する。だが秘密を解消せんとして安易に直観の哲学を立てるなら恣意・独断の危惧を孕む。我とは何

を意味し、我自身にとってどこまで露わであるか。  
 もし実体に関して「時間における持続性」が（疇範によって）知られるならば、「我」は全き闇の中に没するのである。だが範疇の実体を超えるならば知られざる Etwas となろう。闇の問題は理性の理念へと継承されるのである。

（終）

（筆者 東京学芸大学教育学部講師）

告 予 文 論 号 次

|                                        |                       |                                           |
|----------------------------------------|-----------------------|-------------------------------------------|
| 歴史知識における理論（一）……クルト・ヒュブナー<br>神野 慧 一 郎 譯 | カントの先天的認識（一）……長 島 重 次 | デカルトの合理主義について（一）……山 田 弘 明<br>——理性の意義と役割—— |
|----------------------------------------|-----------------------|-------------------------------------------|

次 目 号 前

|                       |                                          |                   |                                              |
|-----------------------|------------------------------------------|-------------------|----------------------------------------------|
| 藤原彫刻に關する一考察（一）……清水 善三 | カントに於ける様相の問題（一）……有 福 考 岳<br>——餘語、東洋的反省—— | 超越論的主観性の問題……田 中 教 | G・W・Fヘーゲル體系以前期における<br>思想形成の内面的展開（一）……安 彦 一 恵 |
|-----------------------|------------------------------------------|-------------------|----------------------------------------------|

---

## THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

---

*The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article.*

### Das Ich und die Erfahrung bei Kant

von Fumitaka Tsutsui

Wir machen den Anfang mit „Widerlegung des Idealismus“ (Kritik der reinen Vernunft, B 274~), wodurch die innere Erfahrung und die äußere uns bekannt werden. In jeder von beiden muß die Materie der Erkenntnis, außer der Form (dem Bewußtsein), gesucht werden.

Was ist die innere Materie? Ist sie (1) Ding an sich hinter dem inneren Sinne (der Zeit), (2) die Zeit selbst, (3) die vom Verstande bestimmte Zeit, oder (4) die bloß objektivierter Intelligenz?

Kant setzt eine „Gleichartigkeit“ in der folgenden Verbindung: Kategorie—Schema—Erscheinung. Zwischen der reinen Form der Anschauung und der äußeren Materie können wir auf der Voraussetzung oder Anerkennung dergleichen Gleichartigkeit hinweisen, wenn er „die transzendentale Materie (B 182)“ angibt; denn „transzendental“ scheint zum Erkenntnissubjekt gehörig zu sein.

Das Ich, als Erkenntnissubjekt, ist von der Dunkelheit und dem Geheimnisse eingeschlossen. Jene bedeutet „unbekanntes Ich“, d. i. ein selbsttätiges Wesen; dieses ist dasjenige, welches im Ursprunge unsrer Sinnlichkeit liegt (vgl. B 334). „Unbekanntes Ich“ möchte entweder für Substanz oder Ding an sich gehalten werden, aber das Ich als Substanz sinkt nicht in die völlige Dunkelheit, sondern kann durch die Kategorie erkannt werden,



weil der Begriff der Substanz nur die Beharrlichkeit in der Zeit enthält. Ohne diese Beharrlichkeit bleibt uns zum Begriffe nichts übrig, als die logische Vorstellung vom Subjekt. Das Ich als Ding an sich kann zugleich „das Bestimmende (158, Anmerkung)“ sein, dessen Spontaneität es ihm nur bewußt ist, denn die innere Materie muß in ihm liegen.

Die Idee der reinen Vernunft (das Problem der Seele) folgt der Untersuchung über die „Dunkelheit“ nach.

## **La réflexion bergsonienne et la réflexion phénoménologique**

—Essai sur la méthode de la philosophie bergsonienne—

*par* Tadashi Ogawa

Cet essai se compose des trois parties: 1) notre interprétation de la méthode philosophique chez Bergson; 2) une étude critique sur la méthode bergsonienne; 3) une confrontation de la phénoménologie avec la réflexion bergsonienne.

La méthode philosophique est, selon Bergson, l'intuition. Mais Bergson dit que "notre intuition est réflexion". (P. M. 95) Cette intuition comme réflexion, est ce contradictoire? Parceque l'intuition en effet signifie, selon Bergson, une conscience directe qui se distingue à peine de l'objet vu, c'est-à-dire une conscience directe qui est contact et même coïncidence. Au contraire, la réflexion signifie que le sujet voyant tient l'objet vu à distance. Il y a donc une ambiguïté dans la pensée de la méthode bergsonienne. Bergson découvrit toute sa philosophie, quand il trouva étonnant que dans la philosophie de Spencer le temps réel, la durée intérieure toute pure, ne joue pas de rôle. Pour *re-trouver* ce qu'il a découvert, il se livra à une longue série de réflexions et d'analyses. Cette réflexion, c'est ce que nous appellerons la réflexion première ou analytique. Après cette réflexion Bergson a *re-trouvé* la vision directe qui manifeste une coïncidence entre la conscience et l'objet. Mais ce n'est pas là assez, parce que la philosophie doit parler de ce qu'il a vu. (Voir. PM. 42, 87, 134) L'intuition qui est "le